



ミキサーに材料をセットしてパン生地をつくる作業を担当する通所者のお二人。



こちらはパンを包装してラベルやステッカーを貼る作業。手際よさが光ります。



上田丸子グランヴィリオゴルフ倶楽部に設置された無人販売コーナー。テーブルや値札、料金は「とんぼハウス」の手作りで、パンの食感をお試しいただけるよう一口サイズの試食パンもあります。

くるみはファンケル副社長の田多井毅さんの提案でした。試行錯誤を重ねて完成したパンは11種類、発芽米特有のもっちりとした食感に中の具材がマッチして、とてもおいしく仕上がりました。

もう一つの課題は販売方法です。地元尾野山の高台に位置する物産館では集客に限界があり、出張販売先を拡大しようにも、人員が足りません。そこで考えたのがパンの無人販売。価格は150円を基本に（一部100円、200円）袋入りのパンを並べ、購入する人は集金箱にお金を入れていただく



「もっと何かできるはず基金」の寄付で購入したミキサー2台。物産館「花風里」のパン工房で活躍中です。

「販売テーブルは通所者の手作りで「ファンケル発芽米使用」とPOPも掲示しています。安心・安全なパンのPRにもなっています」（柳澤さん）

販売コーナーの設置先は着実に増えているほか、三才山（みさやま）病院の喫茶コーナーでは焼き立てのパンを販売することが決定。寄付金で購入したオープンがここで活用される予定です。

仕組みです。早速、柳澤さんが地元施設に依頼に出かけ、国民宿舎鹿月荘と上田丸子グランヴィリオゴルフ倶楽部が趣旨に賛同、販売コーナーを設置してくれました。無人販売コーナーを通じてパン自体のおいしさも評判になり、以前の4倍以上を売り上げるようになりました。販売コーナーのパンは毎日新しいものに交換しますが、完売する施設もあるそう。

ファンケルクラシック基金 今年は国連世界食糧計画に



8月24日に行われたファンケルクラシックの表彰式で、「基金」からの寄付に対して、国連WFP協会の田邊専務理事（右）から大会会長の池森賢二さんに感謝状が贈られました。

（2000年）ファンケルクラシック事務局

8月22日から24日まで、裾野カンツリー倶楽部で開催された第8回ファンケルクラシックでは、大会期間中、ギャラリーのみなさんからの募金やプロ選手愛用品のオークションなどを通じて総額228万4458円（前大会比154%）の寄付金が集まりました。

「ファンケルクラシック基金」はギャラリーのみなさんからのチャリティ募金、PGA（日本プロゴルフ協会）選手会からの寄付、大会会場でのプロ選手愛用品のチャリティオークションおよび即売会、プロ選手との写真撮影＆サイン会、パターゴルフなどのイベントの収益金（全額）、会場で販売したグッズや飲食物の収益金（一部）を合わせたものです。大勢の方々にご協力いただきましたこと、この場を借りて御礼申し上げます。

通所者の生きがいにも 苦勞して作り上げた発芽米オリジナルパンですが、障がい者の自立支援につなげるよう、他の福祉施設でも活用してほしいと柳澤さんはいます。

「パン作りには5名の通所者がかかわっていて、うち2名がミキサーを使っ



まるこ福祉会とんぼハウスの オリジナルパン作りをサポート

「とんぼハウス」のみなさん。前列中央が理事長の柳澤さん。オリジナルパンを製造・販売している丸子町物産館「花風里」の前で。円内は寄付の申請をした木村さん。

『もっと何かできるはず基金』から

発芽米でオリジナルパンを

とんぼハウスでは、これまでも仕入れた冷凍パンを物産館で焼き上げ、出張販売にも取り組んできましたが、思うように売り上げが上がり、苦しい経営が続いていたそうです。

同法人理事長の柳澤正敏さんは、上田市丸子地域自治センターの市民生活課長を務めてきた方。それまで地域になかった、「知的障がいをもつ人たちが社会に出て行けるような施設」を作ろうと働きかけ、平成16年春に法人認可を得たのがまるこ福祉会でした。

「しかし、もともと予算が少ないうえに、昨春の障害者自立支援法の施行でさらに一人あたりの支援額が減ってしまいました。自分たちで仕事をつくり、一人あたりの時給が150円という現状を打破しようと、まさに暗中模索の状態でした」



「とんぼハウス」で作業する通所者のみなさん。使われなくなった保育園の設備を活用した施設で、約20名のみなさんが通っています。



「花風里」で発芽米入りオリジナルパンを試食しました。立って説明してくださっているのは花風里館長の武重和彦さん。

*『もっと何かできるはず基金』から10万円、会社から同額のマッチングギフトを合わせた額。